言葉の革命　日本のアヴァンギャルド文学の意義と可能性
安部公房の死をいたんで。

Mikolaj MELANOWICZ（Warsaw University）

言葉でいきて、言葉で死んだ

安部真知（箱根、1993年３月）

きれいな言葉も、お手本があるんじゃなくて、つくり出すものじゃないか。

Ｄ．キーンとの対談　　「反劇的人間」[1]

安部公房の「もぐら日記」の大部分は、言葉の本質についての思考である。たとえば、９月11日水曜日（1985年の日付けでつぎのようなことを記したのである。）

“言葉の体系、構造、機能、意味を、総体として把握するのは難しい。そもそも〈把握〉という作業そのものが〈言葉〉の機能の一部だからだ。言ってみれば鏡に鏡を映すような作業だ。映して出されるものは無にすぎない”[2]。そういうふうに安部は、国際会議で講演するために思考の道筋をきちんとしていこうとしている。その講演の下書きを「技術と人間」という題名で「もぐらの日記」にいれた。またその講演の内容にも、ことばが本筋になっている。

「じつを言うとしばらく前から、現代の混沌を解読する鍵としてことばの謎の解読に注目しはじめていたのです。」また四行目に「自分の行動と対象の変化を、因果関係として総体的に掌握することです。〈ことば〉の力を借りなければ出来ることではありません」と安部が書いている。[3]

安部公房は、言語理論についてかなり執着していた。[4] でも興味をもったのは、言語と大脳皮質の関係くらいである。とにかく分かりきった問題ではなかったといえる。晩年、安部は、クレオールという概念を見つけて自分の文学がクレオール的なものだと思ったかもしれない。[5]（この場合は、クレオルと言う言葉の意味は、もとの意味とは、だいぶ違ってしまったのである。）間違いなく安部は、自分の文学の独自性を固く信じていた。特殊な新しいことばの文学を造りえたのだ。そういった新しい言語を造ろうとしたのは、石川淳、花田清輝や野間宏などであると思う。

安部公房のことばの起源

安部公房の文学を考えるうえで、20年代に始まった都会の文化とともに発展した探偵小説と科学小説が重大な流れである。モダニズムのアヴァンギャルドの思想や文学だけではないようです。ただ長い間探偵と科学小説は、評論家たちに無視されてきたが、モダニズム文学のほうに取り入れて考えたことはあんまりない。もちろん現代文学の形式と言葉の変化や芸術の水準にとってモダニズムの役割が大きい事は、意義がないであろう。その戦後への影響も副次的なのではない。

安部公房文学の形成にもあきらかなのであろう。

ご承知の通り、すでに瀬沼茂樹は「現代文学」(昭和８年）の第一章〈モダニズム文学の発生〉[6] で、新しい文学の風潮を担った若い世代の作家たちについては、既成レアリズムからの脱却と、マルクス主義の社会変革の思想にたいする対抗意識において、「精神の革命」を主張して新しい小説を生んだというのである。そして新しい物質的な生活のうちに入り込むことによって、「精神の革命」をもたらそうとした。それは近代機械文明と都市生活との性格を強く反映する結果となった。いうまでもなく「精神の革命」は、プロレタリア文学者の社会主義者の「社会の革命」にたいして論争的な態度を表すようである。アヴァンギャルドの思想を受け継いだ文学者は、まず「言葉の革命」をこころみたのである。すくなくとも、日本語との実験的な〈闘争〉が行わなければ、石川淳や安部公房の文学の言葉が生まれるはずはない。そうだといっても探偵小説や科学小説―ＳＦの言葉が20年代から生まれこなければ、安部公房の文学技巧も考えられない。

技法の実験の分野では、伊藤整の業績が多少見下ろされているかもしれない。伊藤整の初期の作品は、ジョイスの「意識の流れ」の技法を模倣しながら、フロイトの潜在意識の分析方法を小説に応用して、知的な新心理主義の方法を主張した。かれの試みは、海外の模倣であるが、新しい技法、思考、主人公などの描写の試みがつぎの世代のために言葉の変化（革命といってもいいような変化）を準備した。伊藤自身は、失敗したにしても文学変化にもたらした力が大きい。

「普賢」(昭和11）の著者である石川淳も、言葉にたいする態度の範囲では、安部公房の先駆者だといえる。石川淳には、〈物質としての言葉しかない。それがきりひらいてゆくところ、石川淳の言語宇宙が立ち現われるであろう。石川淳の作品世界は、安部公房と同じように、ゼロ（虚無）から出発して言語世界を創成する。そしてその限度のさきには、何も無いのである。別の言い方をすれば、その希有の作家は、ただ言葉のみのエネルギーによって、文学の宇宙を構築したのである。

日本の現代小説の展開を考えるうえで、真直ぐ安部公房文学の核心につながる。

安部の言語

安部公房は精巧な文章表現で効果を出すことに成功している。その中で事物はしばしば抽象的概念化し、あるいはまた逆に抽象的概念は記録作家的手法により具体的に描出され、歴然とした形で受け取ることができるのである。安部はカオスを打ち崩して元来の簡単な要因に分解して、見せ掛けや嘘・欺瞞をふるいわけながら新しい秩序を導入していった。世界を改造することの出来る言葉に行動の意義を取り戻せるような、つらい努力をしつづけた、断固たる、妥協しない作家であった。日本的であると同時に、西洋の技巧や構想を総合しながら新しい文学の可能性を探ってきた。写実主義・リアリズムでも自然主義でも、また心理主義のカテゴリーでもつかむことのできない。新しい、文学ヴィジョンを創造していた。

作品の主人公たち

安部公房の長編小説、短編小説、戯曲における主人公たちは、おしなべて両親、子供といった家族の構成員をもっていない。発端において、なまえもなく、個人の生活史もほとんどなく、ほぼ抽象の形をとっている。大体において孤立していて、神への信仰も持たず、人間世界の中で重

要な、欠かせないものとして承認された価値も持たない。主人公と同じように孤独で無力な他者にたいして適応しなければならない。そしてそのことは、うたがいもなく安部の世界のドラマツルギーのもっとも重要な源泉である。もしもなにか得体のしれない、匿名の、設定されたプログラム通りに自動的に行動する、自動制御の力の圧迫に直面して、自分に必要な他者を見つけることや他者を肯定する努力は虚しくおわるとしても、努力そのものは安部の創作活動とその作品に深い意義をもたらした。それはヒューマニズムの新鮮な息吹を呼び起こすのである。

安部の主人公は、〈精神的な「無国籍者」〉であり、孤独で、故郷喪失でもある。そしてその原点を安部の満州での敗戦体験に求める評論家がいる。その無国籍者である作者が、前衛的な芸術を創造したのである。アヴァンギャルド作家としての特徴は異端者の告発者であった。狂気に近い悪意を抱いた男、人間否定ないしはアナーキズムの思想が、この作品を貫いている。狂気に近い異端者の主人公は〈僕自身〉を告発しようとしているのである。結局瘋癲病院に封じ込められる。この枠組みより重大なのは〈言語の行動性〉である。

「終わりし道の標べに」では、書くという行為が終始、自分の名を失うこととすべての名を失わせること、すべての故郷を棄てることとすべての故郷を否定すること—これらの一対のことは同一のことだ—が究極の自己確認ではないかという思想が、堂々めぐりする苦しい弁証の中で叫び声をあげている。

〈終わった所から始めた旅に、終わりはない。〉という言葉から始まるこの手記風の小説は、フィクショナルな物語と哲学的な概念のまわりをめぐる告白である。(7)

故郷などを失って、一切の約束から（愛、国家など）主人公が逃亡する。作者はいまあるものの否定が未来と結びつく。比喩の言葉で書かれる寓話の形式を造る。この転換は「デンドロカカリヤ」で決定的となった。作者は手記風の書き方を棄てた。そして明確に採用したのは観念を具象化する発想である。アヴァンギャルド芸術にあける物への転換である。〈名もないもの〉は名前を喪失するＳ．カルマ氏となり、〈死〉は具体的な死体となり（「無関係な死」）、〈自己否定〉は、繭となり（「赤い繭」）、象徴であった〈樹〉が、植物人間、植物である人間として具象化されて、デンドロカカリヤとなる。

観念の具象化は、花田清輝、岡本太郎、野間宏、埴谷雄高、佐々木基一などから影響を受けた安部は、とくに花田清輝のアヴァンギャルド芸術論に非常な興味を示した。それは〈夜の会〉の運動の参加の時であった。古いリアリズムの殻を崩して自己変革への道を進んでいかなければならないこと、異質のものの対立を対立のまま統一する芸術でなければならないことは花田理論の特徴である。(存在と非存在、肉体と精神、有機体と無機物、ドキュメントとフィクションといった対立)。安部は花田理論の影響でリルケから受け取っていた事物に関する思想を活かして独自のアヴァンギャルドの文学を創作していた。外部の世界と内部の世界との両方を同時に眺め、そのあいだの対応をとらえようとした。結局花田に言われたとおり即物的にかつ知的にかいた。伝統的なものを否定して寓話を作り上げた。(世界の否定—「Ｓ．カルマ氏」、認識変革の夢の肯定—「バベルの塔の狸」)。ドクメンタルな素材で科学的な未来像を造り、未来によって現在を照らそうとするＳＦ風な手法を見出した。意識変革に重点を置いた。

この作家の特有の主人公とテーマは、すでに初期の作品「赤い繭」(1950) に現われている。

この作品では、一人の男が夕暮れ時に街を歩いていて、ある家に入り、自分の家がないからここに住もうと言い、あとで変身して繭になってどこにでも横たわって住めることになる。つまり、主人公には故郷や家がなく、失踪や逃亡または変身という元素の形で現われる。植物に変身するもの（「デンドロカカリヤ」）、植物の生える体のある人間（「カンガルー・ノート」）、棒に変身するもの（「棒」、「棒になった男」）、魚のように水のなかに住める人間（「第四間氷期」）、鳥か飛行機のように空を飛ぶことの出来る人間（「飛ぶ男」）、馬になろうとする男（「密会」）、旅行鞄に変わった男（「鞄」）などは、独自の存在意識がなくて、ただなにものかによって使われることになるのである。そういう形で現代社会における人間の孤立と無能性を初期の50年代の作品から最期まで描きつづけた。いつも超能力を備えた人間をも考えていたのである。（「飛ぶ男」「第四間氷期」）

変身とカフカ

メタモルフォーゼ（変身）のモチーフを安部はカフカの作品に接近させている。—カフカから導きだされているのだ—と言えるのであるが、安部は、初期の作品の参考にしいないようである。後になってからのカミューとの関係は微妙で、大変重要であるとおもわれるのだが。それにもかかわらず、連作小説「壁」などにはカフカの手法が窺われる。

この実存主義的な作家であるカフカ、人生の不可解や非合理を表現した作家に戦後はやく関心をよせたのは、石川淳、花田清輝、安部公房などである。とくに安部の場合、カフカが投影されて、共通問題とテーマを有することは拒めないのである。それは、日常的な現実主義的な背景に非現実的な内容を書くという点である。あとになって、カフカの影響は、とくに倉橋由美子の作品に大きい。それはともかくとして「S．カルマ氏の犯罪」などでは知的ゲームが多く見られ「壁」という作品により、まだ若い安部は、戦後世代を代表する最も主要な、アヴァンギャルドの作家で絶えない実験をつづけたのである。

一番いい小説「砂の女」

「砂の女」のシムボルは、一般論としては、民族あるいは国家の所属ということにかかわりなく、じぶんの運命の比喩として読み取ることが出来よう。戯曲「友達」と同じように、無理に、幸福を人に強制しようとする集団のいう幸福を拒否するという問題が含まれている。「密会」その他の作品においても同じように多重層で他義的なシムボル構造が働いている。まず極限状況におかれている主人公は、目的に近づこうとすればするほど目的から遠ざかっていく。このように拡大する距離は主人公の意志にもかかわらず—「燃えつきた地図」や「密会」がもっとも典型的であるかもしれない—時間と空間をダイナミックに躍動させる原因にもなっている。読者の追っている筋は、出来事としての筋より“言語の行動・活動”なのである。安部の作品の文章は、活動中の言葉であるともいうべきであろう。

結び

安部公房は、文学者として芸術的な最高水準を1960年代に遂げた。「箱男」以来は、現代文明に対する批判的なヴィジョンを深めるとともにシュールレアリスム風な手法をもっと広く大胆に使うようになった。ここでは〈言葉の革命〉という時に言語遊技や初期のシュールレアリズム（モ

ダニズム）の無関係な自由連想の言葉の手法を考えていない。安部は、戦前のモダニズムの宣言や新感覚論を直接に真似たわけではない。意識の流れの手法も利用しようともしなかった。脳裏（頭脳）で改造された言葉を厳しい理知的な規律に服従させた。安部は、本当の練金術師（アルケミスト）になって、その実験室では、〈物〉を分解してその部分（元素）を改めて結合させていた。その〈物〉というのは、言葉（言語）であった。そういった作用された単語を作り上げようとするフィクションの世界の構造につかった。

何百枚の紙の断片に〈加工〉された言葉や思考の部分を記して箱根の山荘の壁にピンで泊めて（言葉が跳んでいかないように）、それを書こうとする作品に使うことを考えた。安部は、習慣的な、センチメンタルな表現の手法を拒否したのである。文学の新しい言語を造ろうとした。生涯の最後の二十年間は、新しい言語さがしの時代であった。

結局その大仕事を完成しえなかったと思う。目的を遂げなかった。長い間言葉や実物の迷路をさまよっていた。新しい秩序を発見することが出来ると思って、そのカオス（混沌）の迷路からでなかった。出ようとしなかったようである。まず思考と〈もの〉のカオスを整理しようとした。危機の状態中世界の中を把握しようとしてその危機状態の意味を整理することが出来ずに終わった。

「箱男」(1973) をはじめ、「方舟さくら丸」(1984)、「カンガルー・ノート」(1991)、「飛ぶ男」(1993) までの世界の開発されたことばとイメージの宝庫の結果に終わった。小説のなかの世界構造は、理知遊技のようなもので終わった。以上の小説は考えることの出来るような機械とでもいえる者たちを描く生産としてのこった。「カンガルー・ノート」や「飛ぶ男」などのなかの空想は、現代読者を感動させないのである。それはロボットか人間の突然変異体の悪夢のような未来（現在を含めるか）の世界である。安部の主人公たちは、文明の分泌する危険物に汚染させて変身して苦しんであるのである。そういうわけで安部の文学言葉の改革の闘争は失敗に終わったと思う。その練金術の実験室で創造した言葉を使って「砂の女」に次ぐ大傑作を造りえなかったからである。しかしながら安部公房の造ったコンピューター用のようなプログラムが次の世代に使われるであろう。いや、もう使われているようである。無意識的にでも。たとえば筒井康隆は、言語の革命を試みているのである。一種のアヴァンギャルドの文学者である。安部公房の実験を必ずだれか引き受けて発展させると思う。

安部は自分の試みの完成が出来なくても世界文学の素顔に絶えない形跡を残していった。

〔参考文献〕

1) 谷真介「安部公房レトリック事典」新潮社　1994、p.135
2) 「もぐら日記」「へるめす」No.46/1993、p.28
3) 同、p.41
4) 辻井喬（大江健三郎、武満徹）、「開発する文学「もぐら日記」から安部公房を読む」、「へるめす」No.46/1993、p.56
5) 今福龍大「言語の伽藍を超えて—安部公房とクレオル主義」「へるめす」No.46/1993、p.66
6) 桶谷秀昭「昭和精神史」、「文芸春秋」1992、p.66-70
7) 渡辺広士「安部公房」、審美社　1976、p.16
8) 同、19